

「夕方日が沈みかけ、空が紅色に染まる頃、沼越しに富士山を幾度見たかわからない。」

「入り日が綺麗なこと」「富士が素敵だ!」とも角一家のうちで先に見つけたものがこう叫ぶ。

よく志賀の家の窓から首をのぼして大人から子供から下女まで西の空を眺めたものだ。こゝは地上の美しい場所の一つだと思った。」

柳宗悦 「白樺 大正十二年四月号」より

千葉県我孫子市手賀沼。かつて沼の美しさに惹かれ、白樺流の芸術家達が居を構えた土地である。各々作家達は自然から着想を得、沼の傍らで詩を詠み、歌を歌い、陶器を制作したのだろう。

上の文章は、作家の一人である柳宗悦が、手賀沼を去る際に残した文章である。

この言葉により盲目の人は何を思い描くのだろうか。昔、志賀直哉の家から見えていた沼の風景も、宅地化により現在は面積が縮小し、生活排水が流れ込むことにより変質していった。

しかし言葉は時代を超えて残り続ける。

我々、見える人間とは違い
純粋に言葉からイメージを得る盲目の人達には、かつて白樺流の作家達が見ていた風景が見えるのかもしれない。



幻視の塔

配置
旧志賀直哉邸宅付近で夕日が入りやすい様、西に最も沼が開けている位置に配置。

機能
白樺文学館別館。目の見えぬ人にも楽しめるよう既存の文学館の機能を補足するものと位置付ける。

空間構成
見える人どと見えぬ人どが、体験を共有することを促すため、空間の明暗を空気の温度差に置換して用いる。

一層は沼の水面がそのまま張られており冷たい空気で満たされている。

また、開口は水面からわずかに開けられているのみであり、水面から天井まで闇のグラデーションが作られ、階段を上がるにつれて深い闇に包まれる。

二、三層は触覚のフロア。暗闇の中を壁沿いに配置された彫刻や陶器を、触ることで作品を理解する。二層は暗闇の中で質感や形を、三層では光の元で色を含めて鑑賞することができる。

四層は、西に大きな開口が開けられ光が差し込み、暖かさに包まれた空間である。

